

立つことになった。

明治14(1881)年夏、楯子は桜井女学校の校長代理に就任。一切の職務を委譲された楯子は女学校の諸付属事業の実施を開始した。

その職務を精力的にならしていた明治19(1886)年、アメリカの万国婦人禁酒会遊説委員レビット夫人が来日。キリスト教信者による禁酒運動が起こった。これは、夫の酒乱に苦しめられた楯子を動かした。同年12月6日「東京婦人矯風会」が創立され、楯子はその活動に心血を注ぐようになる。

明治23(1890)年、桜井女学校と新栄女学校が合併して「女子学院」が創立。信頼を得ていた楯子は57歳にして初代「女子学院」院長に就任した。大正3(1914)年に81歳で退職するまで24年間院長を勤めた後、名誉院長に就任している。

一生を捧げた想い

明治26(1893)年楯子60歳のとき矯風会の全



東京都千代田区的女子学院内にある講堂。礼拝や講演会などで利用される。パイプオルガンも併設。

国組織を結成、「日本キリスト教婦人矯風会」会頭となった。姉の徳富久子は妹楯子の始めた矯風会の活動に積極的に参加し、これを支えている。また久子の孫であり、蘇峰・蘆花の姪の久布白落実は楯子の遺志を継ぎ矯風会活動に生涯を尽くした。

矯風事業に尽くす楯子の情熱は日本国外にも向かい、明治39(1906)年、74歳にして渡米、万国矯風会第7回大会に出席、セオドア・ルーズベルト大統領と会見。大正9(1920)年には欧米の旅に出掛け、翌10(1921)

1)年には満州に、同年から11(1922)年にかけて三度目の渡米。楯子は89歳であった。

その後は禁酒運動、公娼制度廃止運動等に尽力するも、大正14(1925)年6月半ば、楯子は眠るように大往生を遂げた。楯子が生き抜いた時代は、現代のように女性が人間として尊重されることがなかった。楯子は婦人解放と地位向上のためにその一生を捧げた。

参考文献

町ふるさと学芸員講座講師堤克彦著「矢嶋家と四賢婦人のわかるシリーズ『矢嶋楯子』」

楯子と時代を開いた姉たち

この姉妹を人は、「四賢婦人」と呼ぶ



横井つせ子 よこいっせこ

天保2(1831)年生まれ 矢嶋家五女として生まれる。26歳の時、思想家・政治家の横井小楠に嫁ぎ、明治維新への大業参加を支えた。「夫は天下人である。妻たる自分もできるだけ学問をして夫の名を辱めることがないように」と励む。それに対して小楠は「おつせは君子だ」と賛美の声を贈ったという。姉順子、妹楯子の女子教育・婦人解放運動を支えた。明治27年64歳没。



徳富久子 とくとみひさこ

文政12(1829)年生まれ 矢嶋家四女として生まれる。横井小楠の高弟で明治3(1870)年の肥後藩政改革の中心人物である徳富一敬に嫁ぐ。近代日本の言論人徳富蘇峰、小説家徳富蘆花兄弟の母として厳格な家庭教育を実践した。女子教育のための学校設立案を提唱し、姉順子の女子教育、妹楯子の日本キリスト教婦人矯風会活動を積極的に支えた。大正8年91歳没。



竹崎順子 たけざきじゅんこ

文政8(1825)年生まれ 矢嶋家三女として生まれる。明治における女子教育の先駆者。明治22年熊本女学校(後の熊本フェイス学院高等学校。現在は開新高等学校と合併)を創立。多くの女性の人材を世に送り出し、明治38年、81歳の終焉まで校長として、その責務を全うし、現在も校母として尊敬されている。